

2021年4月4日（日）「死からのちへと移し給うイエス」

ヨハネ 5:19-29

19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「よくよく言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何もすることができない。父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。20 父は子を愛して、ご自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたがたは驚くことになる。21 父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、自分の望む者に命を与える。22 また、父は誰をも裁かず、裁きをすべて子に委ねておられる。23 すべての人が、父を敬うように、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

24 よくよく言うておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。25 よくよく言うておく。死んだ者が神の子の声を聞き、聞いた者が生きる時が来る。今がその時である。26 父が、ご自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにして下さったからである。27 また、父は裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。28 このことで驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く。29 そして、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るであろう。

【序論】

イースターおめでとうございます。この教会では、一昨年まで毎年のイースター礼拝において、ヨハネ福音書 20～21 章に描かれている主イエスの復活とその後の弟子たちへの顕現の記事を一通り学んでまいりました。実は、主の復活物語そのものは新約聖書の中にさほど多くはなく、共観福音書を含めても限りがあります。そこで、昨年から指向を変えて「復活の意味」を中心に学び始めました。イエス・キリストが、信じる人に与える「復活のいのち」とはどういうものなのか。これはキリスト教の真髄と言ってもよいでしょう。クリスチャンは何を希望として持っているのか。また、世に向けてどのような希望を投げかけているのか。キリスト教はなぜ信ずるべき教えなのか。私たちの地上の生涯と死後の状態に如何なる影響を与えるものなのか。今日はヨハネ 5 章で語られている主イエスの御言葉を通して、これらのことを確認していきたいと思います。この箇所は「霊的死／霊的復活」と「肉体的死／肉体的復活」のエッセンスが凝縮されています。

【文脈】

まず、この箇所がどのような文脈上に置かれているかを確認しておきましょう。ヨハネ5章は、ベテスダと呼ばれる池で主イエスが38年間病気に罹っていた人を癒されたという記事で始まっています。ところが、その御業が行なわれた日がユダヤ人の安息日であったため、ユダヤ教の指導者たちは「それは労働ではないか」「安息日に働くことは違法ではないか」と咎めたというのです。この「律法遵守」という感覚は、私たち日本人にはなかなか理解できないかもしれません。どうして主イエスが良いことをなさっているのに、それを公然と非難する人々が毎度現れるのか。彼らには彼らなりの理由がありました。モーセ律法では、安息日には一切の労働をしてはいけないという戒めが確かにあり（出20:8-11、レビ19:3）、その法を破って死刑になった人さえいたからです（民数15:32-36）。それほどに神の法は侵されてはならないものだった。このことを肝に命じ、自らも厳格に生き、人々にも教えていた。彼らにとって神の御前に正しくあることは、神の法を守ることにほかならなかったのです。

しかしながら、主イエスは律法を軽んじておられたのでは断じてありません。神の法を愛し、その表面ではなく「心」を行なうことを民衆に教えておられた。神の法は人の幸せのために与えられたものであるから、人を愛すること（ここでは癒しを行なうこと）は、決して律法違反ではないのだ。安息日を文字通り守ることに固執すること以上に、人が罪の縄目、肉体的な縄目から解放されることはもっと重要なことなのだ。安息日にこそ人は解放されるべきではないのか。これが主イエスの論理でした。実際、この癒しの御業は神にしかできないものであり、それを見て民衆の多くは神を崇めていました。

本論1. 御子の権能（いのちの付与／審き）

主イエスはこの驚くべき御業を行ない、ご自分のなさるすべてのことは神から出ているものだと説明されます。

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「よくよく言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何もすることができない。父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。」（5:19）

ここでの強調点は、主イエスが父なる神様と一つであるということです。御父の主権を認め、自分は独自に行動しているのではなく、何をするにも神の御心の通りに行なっていることを主張しておられます。「自分からは何もすることができない」というのは、無能力性ではなく、神の子の性質上父なる神様の御心に反することは行なえないということ

を意味します。父と子はひとつであり、神の御業もまたひとつである。

父は子を愛して、ご自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたがたは驚くことになる。(5:20)

「これらのことよりも大きな業」という表現が出てきます。「これらのこと」とは、おそらく民衆が見てきた「癒しの御業」のことが言われているのでしょう。人々はそれに驚嘆していた。しかし、主イエスは「あなたがたはその程度のことで驚いているのか。今後あなたがたが見るようになることは、もっと驚くべきことだ」と言っておられるのです。では、その「驚くべきこと」とは何でしょうか。今日の箇所では二つの事柄が挙げられています。

父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、自分の望む者に命を与える。また、父は誰をも裁かず、裁きをすべて子に委ねておられる。(5:21-22)

主イエスがなさる驚くべき御業とは、第一に死者を復活させるということ、第二に最終的な審きをなさるということです。これらはいずれも終末的な出来事であり、世の終わりに行なわれる最後の審判の全権が御子イエスに託されているということの意味を意味します。人の永遠の行き先を決定するのも主イエスであり、死者に復活のいのちを与えるのも主イエスであると。

ユダヤ人にとって、世の終わりに審きをなさるのは神以外におられませんでしたが、この主イエスの発言がとんでもなく聞こえたのは言うまでもありません。「この男は自分を神の位置に置いている。冒瀆だ」。そう捉える者がいても仕方ないほどの決定的なことばであります。これは、主イエスを誰だと認識するかによって、捉え方が全く違ってくる。信仰をもって聞くと、主イエスこそ神であるとの理解に至るでしょう。しかし、信仰なしに聞けば、自らを神格化する冒瀆者、ペテン師としか思えないものとなります。

本論 2. 霊的な死と復活

さて、24 節以下では「死者の復活」が二つの意味で説明されています。サラッと読むだけでは「二つの意味」を見分けることは難しいですが、主イエスが「霊的な死と復活」と「肉体的な死と復活」の両方について言及しておられることが分かります。まず、「霊的な死と復活」について。

よくよく言うておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。よくよく言うておく。死んだ者が神の子の声を聞き、聞いた者が生きる時が来る。今がその時である。(5:24-25)

25 節に「**死んだ者**」という表現が出てきます。これは「肉体的に死んだ者」を意味するものではありません。「霊的に神から離れている者」「神の御前にいのちなき者」のことが言われています。聖書は、人は皆そのような状態で生まれてくると語っている。そして、自分がそのような状態にあることにすら気づいていないと。パウロも同様のことを言っています。

さて、あなたがたは、過ちと罪のために死んだ者であって、かつては罪の中で、この世の神ならぬ神に従って歩んでいました。空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な子らに今も働く霊に従って歩んでいたのです。(エペソ 2:1-2)

まことの神を知らずに生きている状態、この方から離れている状態を「霊的死」と呼びます。主イエスが語られた「放蕩息子」の譬は、このことをよく描いているでしょう(ルカ 15:11-32)。この譬話では、ある富豪の父に二人の息子がいたという設定になっています。しかし、この二人の息子にはそれぞれ違った形での問題があった。父親との関係において問題があったのです。

一人の息子は父親から財産をもらい受けると、父の許を去って乱費し、墮落の道を突き進んで行きました。この父親は「神」を比喩的に表している人物でありますから、神の許を離れるということ自体がこの息子の人生をおかしくしてしまっていることになります。自分のアイデンティティを喪失し、どう生きてよいか分からない状態になる。それがすべての人間が陥っている姿だということです。心当たりがないでしょうか。私たちは誰もが、自分の生き方は本当にこれでよいのだろうかと悩んだことがあるはずです。心では「これはいけないことだ」と分かっているがやってしまうこともある。まさに「道に迷った」状態であることにふと気がつく時がある。ほとんどの人は自分が道に迷っているということにすら気づいていないのです。

もう一人の息子は真面目で、父の許から離れたことはありませんでした。ところが、この息子にもやはり違った面で父親との関係に問題がありました。彼は父親の傍にしながら、父の愛を知らなかったのです。そして、その心の内には父親に対する不満と憎しみが隠れていました。生きていくうえで必要なものはすべて与えられていながら、それを感謝して生きることができなかったのです。そして、もう一人の息子に対する父親の愛情も妬ましく思われて仕方ありませんでした。この歪んだ心というの、やはり私たちに当てはまるどころがあります。自分の人生に向けられた神の愛を知らずに生きているところに、同様の問題が潜んでいると言えるでしょう。

主イエスは「霊的に死んだ者」にいのちを与えるために来られました。そのいのちとは、神の御前に生きる者となること。神の愛に捉えられ、神と共に生きることです。これは地上において与えられる「永遠のいのち」であります。この「いのち」を得た者は、

審かれることがないと言われている。なぜなら、その人が犯した罪は、主イエスがすべて処理して下さるからです。主イエスは罪人が本来受けるべき刑罰を身代わりに背負って十字架に架かってくださった。このことを信じる人にとって、審きは既に完了している。言い換えるならば、神との関係は永遠に続くものとなっているのです。

本論 3. 肉体的な死と復活

次に「肉体的な死と復活」について。

また、父は裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。このことで驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く。そして、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るであろう。(5:27-29)

ここでは、肉体的に死んだすべての人が、世の終わりに審きを受けるために復活するということが言われています。この「復活」は「永遠のいのちへの復活」とは異なります。この日には、神の御心に適う人（生前に主イエス信じた人）も、そうでない人（信じなかった人）も、いずれも死から目覚めて神の御前になることになる。「死者よ、目覚めよ！」という主イエスの声によって目を覚ますことになるでしょう。そして、一人ずつ審判者なる神の御前に出て行き、この地上で歩んだ人生の全体が問われることとなります。その時、永遠の行き先を決定する権能が与えられているのは主イエスだということなのです。審判者であるイエスには、判断を下すうえでのたった一つの基準があります。それは、主イエスへの信仰があるかないかです。このことはいくつかの異なる表現で言い換えることができます。

- ・ 額にキリストの烙印が押されているか
- ・ 霊的に生きた者であるか
- ・ 神との交わりがあるか
- ・ 聖霊が宿っているか

いずれも同じ意味であり、救われているかどうかの言い換えです。29節では「善を行った者」という言い方がなされていますが、これは「倫理的な意味」で言われているのではありません。主イエスを信じたかどうかであります。神の御前における「善」とは、神からの恵みを受け取る事だからです。そして、その人の内に信仰が見出されるならば、その人が行くべき場所、神の許での永遠の安息に入れられるのです。この時に起きる出来事も、聖書はいくつかの側面から約束しています。

- ・ 朽ちることのない栄光のからだを与えられる（I コリント 15:42-49）

- ・ 新しい天と新しい地を見る（黙示録 21:1）
- ・ 永遠に神を礼拝する（21:3）
- ・ もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない（21:4）

【結論】

以上のように、地上の生涯において「永遠のいのち」を得ることは、肉体的に死んだ後で私たちが経験することと直結しているということが分かるでしょう。主イエスの語り方は、あたかも両者が混同されているかのように感じられます。それもそのはず。主イエスの中では両者は二つで一つだからです。今日は敢えて両者を分けてご説明しましたが、主イエスは世の終わりに私たちが経験するはずの「審き」をご自身の十字架において終わらせるために来てくださったのです。主を信じる人の審きは、主イエスを信じたその時、主イエスの十字架において先に完了してしまふ。私たちが本来受けるべき罪の呪いは、主が代わりに背負って十字架上で滅ぼされたからです。神様はこれをギフトとして私たちに与えてくださいました。イースターには、もう与えられてしまった「復活のいのち」「神との永遠の交わり」を喜び祝うのです。

よくよく言うておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。（5:24）

ここで使われている「移っている」(μεταβέβηκεν) という動詞は完了形であり、私たちが既に決定的に死からいのちへと「移ってしまっている」ことを強調しています。主イエスの十字架と復活はそれほど確実な意味を持つものなのです。

【祈り】

復活の主、イエス・キリストの父なる神様。「神との関係」におけるいのちを喪失したままに生まれてくる私たちを憐れんでください。いえ、あなたは人類を憐れみ、ご自身との関係を取り戻すことができるように、主イエスを世に遣わしてくださいました。主の十字架の御業は完全であり、依り頼む者には価なしに義が与えられると約束されています。私たちはこのことを信じて信仰に入りました。そして、信じるすべての者にもう一つの約束が与えられています。それは、朽ちることのない復活のからだを与えられるということです。私たちはこの約束を信じ、主イエスに留まり続けます。いのちの源、ぶどうの木であるイエスに結びつく枝であり続けさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
慈愛の父として、ご自身との交わりに留まることを求め給う、父なる神の愛、
失われた者を取り戻すため、多くの人の審きを一身に引き受け給うた、主イエス・キリス
トの恵み、
現在において霊的ないのちを与え、死後においては不朽のからだを与え給う、聖霊の親
しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。